

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520922

研究課題名(和文) 四隅突出型墳丘墓の発達に関する考古学的研究

研究課題名(英文) An archaeological research on development of the burial mounds in the Yayoi period

研究代表者

野島 永 (NOJIMA, Hisashi)

広島大学・文学研究科・准教授

研究者番号：80379908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)： 弥生時代後半期の墳丘墓の発達に関する研究をおこなった。広島県北部、庄原市にある佐田谷・佐田峠墳墓群墳墓群の発掘調査を行ってきた。そのなかで、弥生時代中期末葉となる佐田峠3号墓は被葬者の埋葬後に墳丘を構築していたことが判明したが、後期初頭の佐田谷1号墓では、墳丘を構築した後に埋葬が行われていた。類例調査を行った結果、山陰地方周辺では、弥生時代中期、埋葬の後に墓壇封土を盛り、小さな墳丘を構築するのに対して、後期以降、大型墳丘を構築した後に中心墓壇が穿たれ、より盛大な埋葬が行われる事例が出現することが判明した。

研究成果の概要(英文)： I conducted an archaeological research on development of the burial mounds (small mound grave, funkyu-bo) at CHUGOKU district in the Yayoi period. We campaigned for the excavation works at SATADANI and SATADAO Yayoi burial mounds in Shobara city, Hiroshima pref. The upshot of our investigation, it would appear that Yayoi men dug some burial grave pits on ahead, then they buried their leaders and built the mound made of earth in rectangular shape at last, in the case of SATADAO burial mound No.3. Meanwhile, in the case of SATADANI burial mound No.1, it came that the mound building preceded its burial. In many similar burial mounds in SAN'IN region and its circumferences, it became clear that the mound building after burial-type was small and common in the middle Yayoi period, but the burial after mound building-types increased rapidly and became bigger than before, and some of them, their central burial grave pits became much bigger than peripheral ones eventually, during the late Yayoi period.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：弥生時代 四隅突出型墳丘墓 方形貼石墓 墳丘構造

1. 研究開始当初の背景

(1)佐田谷1号墓は一般国道183号線の建設にともなって発見され、昭和61年、(財)広島県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が行われた。この調査によって、佐田谷墳墓群が弥生時代中期末葉から後期初頭に属する初期四隅突出型墳丘墓群であることが判明しただけでなく、その西側に佐田峠墳墓群も確認された。昭和62年には広島県教育委員会および、庄原市教育委員会、広島県土木建築部、広島県庄原土木事務所などによる協議の結果、佐田谷墳墓群の現状保存が実現した。しかしその後、佐田峠墳墓群が地域高規格道路(一般国道183号のバイパス整備計画)の路線地内に含まれたことから、平成9・10年度に庄原市教育委員会によって試掘調査が行われ、3号墓も四隅突出型墳丘墓であることが確実となった。さらには3号墓の周辺にも方形貼石墓(4号墓)や方形周溝墓(5号墓)かと推測される遺構の存在が明らかとなったため、庄原市教育委員会と広島県庄原土木事務所の協議によって遺構確認範囲の現状保存がなされた。

このうち、庄原市教育委員会は破壊を免れた両墳墓群の史跡指定の可能性を模索するために、その規模や埋葬施設の内容、築造時期などを把握することとし、広島大学文学研究科考古学研究室に協力をもとめた。広島大学考古学研究室は庄原市教育委員会からの委託調査の依頼を受け、弥生時代中期後葉から後期前葉となる佐田谷墳墓群・佐田峠墳墓群の発掘調査を行うこととなった。

(2) 覇権を争ったと考えられてきた九州北部と大和地域は貼石などの外表施設をもつ墳丘墓の成立と発達に関して、直接的には関与してはいないことが明らかとなってきた。

その一方で、弥生時代中期、墳丘周囲に貼石・列石をもつ墳丘墓が最初に発達するのは、山陰地方とその周辺地域であることがわかってきた。首飾りなど装飾品の生産や鉄素材の輸入を活発に行ってきた当該地域では、弥生時代中期からいち早く墳丘墓を造営し、後期には墳丘を大型化・巨大化させていくのである。なかでも広島県北部の三次・庄原地域と丹後地域はさらに一歩進んでおり、中期には多くの墳丘墓を造営し、後期初頭にはすでにその大型化を実現させる。弥生時代墳丘墓の発達を考究する上で、重要な研究対象地域であるといえる。

2. 研究の目的

弥生時代後半期、山陰地方とその周辺域における四隅突出型墳丘墓の発生と発達について考察する。多くの研究者は弥生時代の墳丘墓は墳丘築成後に墳頂部に墓壙(墓穴)を掘削するはずであるとA・プリアリに判断している場合が多く、問題点さえ認識されていない。本研究の重要な点は、これまで等閑視されていた初期四隅突出型墳丘墓の墓壙

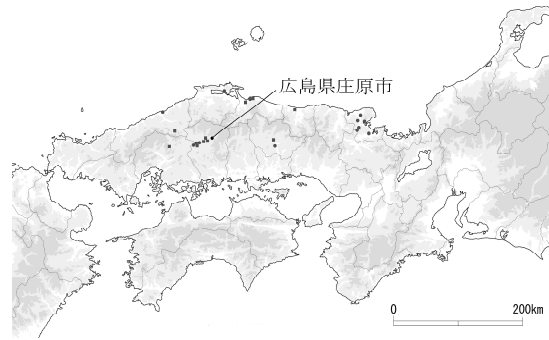


図1 初期方形墳丘墓の分布(方形貼石墓 四隅突出型墳丘墓)

(墓穴)掘削・埋葬時期と墳丘構築段階との関係を再検証していくことにある。これにより、被葬者の埋葬と墳丘構築の先後関係を示し、その関係変化の過程を墳丘構築構造の変容として捉える。広島県北部、三次市・庄原市における初期四隅突出型墳丘墓の墳丘構築状況を明らかにし、四隅の突出部の発達過程を再構成するとともに、弥生墳丘墓の発展の具体的様相を考察していく。

3. 研究の方法

(1)本研究は、初期四隅突出型墳丘墓の墳丘構造の発達過程を具体的に描出する。近年、方形貼石墓や初期の四隅突出型墳丘墓のなかには、墳丘構築以前に埋葬が行われているものがあることがわかってきた。墓壙(墓穴)掘削・埋葬よりも後に墳丘盛り土が構築されることになるのである。一般的に四隅の突出部分は葬送儀礼の際の「墓道」として発達したと理解されるが、四隅突出部分が埋葬を終了し、さらに墳丘構築を行った後に築成されたとすれば、それを「墓道」として機能したと積極的に肯定することが難しくなる。突出部などの墳丘形態の発展変化を平面的に捉えるのではなく、埋葬時期の差異や墳丘構築方法の変化などから解明することとした。

とくに初期四隅突出型墳丘墓や方形貼石墓などの発掘調査例は調査年代が古く、土層断面図等の詳細図が報告書に掲載されていない場合も多いことから、未公表の土層断面図原図の確認作業を行った。当時の発掘調査測量原図や調査写真などから墓壙掘削と埋葬時期、墳丘盛土の状況から墳丘構築方法を推測し、墓壙掘削・埋葬と墳丘構築の先後関係を確認していった。

(2)当然ながら首長墳墓の発達は首長層の経済的権力に支えられており、生産力の管理と生産・流通秩序の確立とその支配の如何にかかわってくることとなる。墳丘墓の発生あるいは発達の主要な原因が当該地域の手工業生産の高揚によるものなのか、長距離交易あるいは商業的交易によるものなのか、または集団間の抗争やボトラッチなどといった競争的な全体的給付によるものなのか、それぞれの発展要因を作業仮説として扱い、個別的に考古学的証拠を検証材料として社会変容の発展要因を推測する。

4. 研究成果

(1) 広島大学考古学研究室が行なった佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査では、弥生時代中期末葉の佐田峠3号墓の墳丘最下部で墓壙を確認した。土層断面から、墓壙を埋め戻した後に埋葬施設の封土をおこない、さらなる墓壙掘削・埋葬と封土が施されることで墳丘が大型化したこと（墳丘同時進行型）が確認できた。一方で、後期初頭の佐田谷1号墓では墳丘構築後、墳頂部から直接墓壙が掘削されていたことから、墳丘構築後に墓壙が掘削され、埋葬が行われたこと（墳丘先行型）が判明しており、同一墓域内での墳丘構築方法に変化が起っていたことがわかってきた。

このため、これまで発掘調査されてきた方形貼石墓や初期四隅突出型墳丘墓の墳丘土層断面図原図を再検討していったが、弥生時代中期前半には墓壙掘削・埋葬のあとに封土を盛るだけの小型墳墓（墳丘後行型）が江の川下流域から広がるが、弥生時代中期から後期前葉までには、墓壙掘削・埋葬と封土を繰り返す墳丘同時進行型の墳丘墓が一定程度存在していたことを確認することができた（図2）。さらに後期になると、墳丘先行型による墳墓の大型化が明確になり、中心埋葬がより顕現化していく変化を把握することができた（図3）。

(2) この墳丘墓の構築状況の変容を、葬送のなかでどのように解釈したらよいであろうか。その解釈のひとつに、埋葬される首長の

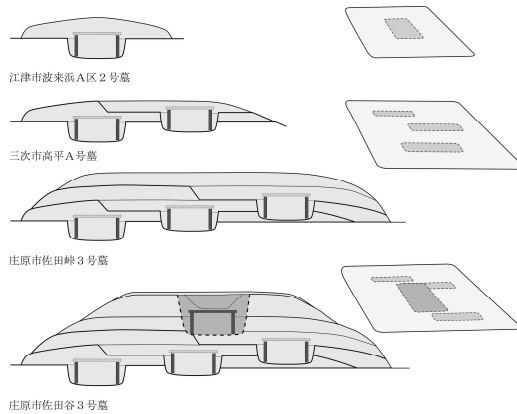


図2 墳丘後行型から墳丘同時進行型へ（弥生時代中期）

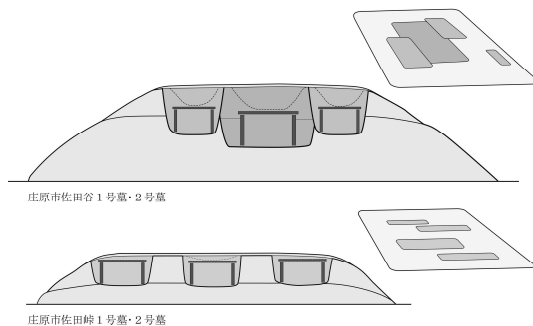


図3 墳丘先行型墳丘墓の格差（弥生時代後期）

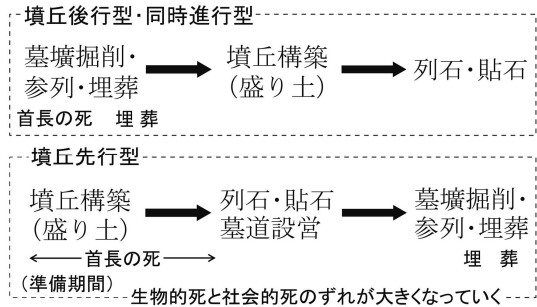


図4 墳丘構築方法と葬送儀礼

死に関する状況が変化したことによって引き起こされたと考える。墳丘構造の変化は首長の死によって引き起こされる社会的不安を軽減するために、葬送により多くの儀礼的措施を必要とせざるをえなくなったと想像することができる。一般的に複雑化した人間社会では、**生物的死**による被葬者を祭祀資源とし、**社会的死**を経て「想像的再生」を実現するための社会行為としての葬送儀礼が必要になってくる。とくに首長など社会的地位の高い人物については**生物的死**と**社会的死**の隔たりを人為的に作り上げていくことによって、首長権威の維持、あるいはそれによって作り出される地位・階層性の社会的再生産を目論むことにもなる（図4）。

(3) また、埋葬手順だけでなく、埋葬施設（墓壙）の変化も明らかとなってきた。今回の調査研究によって、弥生時代後期初頭には、中心埋葬が大型化し、周辺埋葬が圍繞する墓壙配置（**周辺埋葬重複形配置**）に発展していくことが判明した。これにより、中心墓壙にはより多くの労力を必要とする葬送儀礼が存在したことが推測されるわけであり、埋葬された被葬者はやはり、墳丘墓の主人公として顕彰される人物と認識され、その後の周辺埋葬のたびに、想起されるべき人物であったことが窺い知れるわけである。

佐田谷1号墓は中心埋葬の大型化、墓壙上面の土器供献、栗石の散布、さらには木棺・木槨構造などから、その葬送儀礼に後期後半以降、出雲や吉備地域において巨大化する弥生墳丘墓の遡源ともなる諸要素が多分に含まれている。佐田谷2号墓と3号墓においても、周辺埋葬が中心埋葬に重複しつつ圍繞する**周辺埋葬重複形配置**が明らかになったことによって、その蓋然性はさらに高くなったといえる。

(4) 弥生時代後期初頭の段階において中心墓壙が極端に大型化し、長大化した木棺あるいは木槨をもつようになり、かつ周辺埋葬によって圍繞される墓壙配置を成立させた地域は広島県北部の三次・庄原地域のほかには丹後地域しかない。研究当初の背景において述べたように、この丹後地域と三次・庄原地域は弥生時代後期後葉に傑出した墳丘墓を作り出す出雲・吉備両地域に先駆けて、弥生時

代中期から墳丘墓を独自に発展させてきた。丹後地域では弥生中期から後期において、方形貼石墓から方形台状墓へとその墓制を刷新していくが、同一墳墓群内においてその変化が見出せるわけではなかった。しかし、庄原地域の佐田谷・佐田峠墳墓群は、中期から後期への墳墓の変容をみごとに垣間見ることができる唯一の墳墓群であるということができ、弥生墳丘墓発展の結節点であるという認識をもつことができた。

(5)総括すれば、広島県北部の初期四隅突出型墳丘墓は弥生時代中期、山陰江津地方との関係を強く持つ三次地域から、後期には吉備地域との交流をもつ庄原地域へとその中心を移し、墳丘構築後の埋葬が普遍化し、墳丘自体も大型化していくなかで、一部に中心埋葬の厚葬化が実現していく過程を明らかにすることができた。

このような墳丘墓構造の変化をもたらした葬送儀礼の複雑化は、出雲や吉備地域など遠隔地との交流によって引き起こされたことを想定することができた。鉄器生産など手工業技術の発達によって、日常的な生産活動においても遠隔地との交易による資源獲得活動がより重要になっていったことから、手工業生産と交易を差配する地域首長の経済的優位が確立し、その社会的地位の継承のために、「舞台装置」としての墳丘墓がクローズアップされていった過程と推察することができた。

(6)さらには比較考古学的視点から、今後このような墳丘墓の構造変化を埋葬儀礼の複雑化に関わる考古学的現象と仮定し、ヨーロッパ青銅器・初期鉄器時代社会などとの対比を行っていく展望を持つことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

1.野島 永・稲垣寿彦「佐田谷・佐田峠墳墓群の発掘調査をめぐって」『広島県文化財ニュース』広島県文化財協会、査読無し、2014年1月、4~11頁。

2.野島 永・辻村哲農・藤井雅大・村田 晋「佐田谷・佐田峠墳墓群(第6次調査)」『広島大学大学院文学研究科 広島大学考古学研究室紀要』第5号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、査読無し、2013年3月、27~48頁。

3.脇山佳奈・今福拓哉・小森由佳里・野島 永「佐田峠墳墓群(第5次調査)」『広島大学大学院文学研究科 広島大学考古学研究室紀要』第4号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、査読無し、2012年3月、21~46頁。

[学会発表](計6件)

1.今福拓哉「佐田峠墳墓群の調査成果」考古学研究会岡山2月例会、2013年2月9日(於岡山大学)

2.藤井雅大・村田晋・今福拓哉・野島 永・辻村哲農・古瀬清秀「庄原市佐田峠墳墓群の第6次調査について」2012年度広島史学研究会大会考古部会、2012年10月28日(於広島大学)

3.野島 永「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」ここまでわかった中国山地の原始・古代1、広島県立歴史民俗資料館特別企画展開催記念講演会、2012年10月13日(於広島県立歴史民俗資料館)

4.今福拓哉・脇山佳奈・小森由佳里・野島 永・辻村哲農「庄原市佐田峠墳墓群の第5次調査について」2011年度広島史学研究会大会考古部会、2011年10月25日(於広島大学)

5.野島 永「弥生から古墳へ 墓と鉄の道具からみた社会の変化」平成23年度時悠館春の企画展開催記念講演会、2011年5月12日(於庄原帝釈峡博物展示施設時悠館)

6.野島 永「四隅突出型墳丘墓の成立をめぐって」出雲の森博物館開館1周年記念講演会、2011年4月29日(於出雲弥生の森博物館)

6. 研究組織

(1)研究代表者

野島 永(NOJIMA, Hisashi)

広島大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：80379908

(2)研究分担者

古瀬 清秀(FURUSE, Kiyohide)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70136018